

愛に理由などありません

映画『アンナ・カレーニナ』

中野 香織

魂をわしづかみにされて、続けて二度も見てしまいました。ジョー・ライト監督の「アンナ・カレーニナ」。恋愛文学の金字塔として不動の地位を占めるトルストイの原作は、すでに何度も映画化されています。ヒロインを演じた女優も、グレン・ガルボ、ヴィヴィアン・リー、ソフィー・マルソーと映画史に残る美女たち。21世紀の今、どういふ新しいアプローチが可能なのかと興味津々でしたが、独創的な演出にライト監督の果敢なチャレンジ精神を見ました。

各シーンが舞台劇のように展開していくのです。鉄道も競馬場もスケートリンクも、凝った舞台セットの中に入り込んでしまいます。扉を開けるとそこは次のシーンの舞台になり、複雑なセットは途切れなく続いていきます。ただ、田舎の領地や屋外のピクニックのシーンは自然なロケ。そんな緩急自在な場面展開に一貫した流れを与えているのが、タリオ・マリアネリによる音楽です。当初は、映画と舞台とオペラとミュージカルが合体したような不思議な演出の、そのあざとさのほうが目についたのですが、途中から監督の知的な意図に気がついてそのリズムにはまっていました。

意図とはすなわち、1870年代、帝政ロシア時代のサント・ペテルブルクの社交界の貴族たちの「演技」を強調すること。当時のロシア人たちは、自分たちは東ではなく西ヨーロッパの一員だと決めて、フランス社交界を模倣していたのです。その模倣の演技が、劇場風セット、とりわけ窓のない閉塞感あるセットで強調されるわけです。ちなみにこの映画に出てくるロシア人を演じているのはほとんどイギリス人俳優ですが、英語を話していてもみなちゃんとロシア人に見えます。ヘアメイクの威力。

ともあれ、この不思議な演出が強調する社交界の演技が、帝政ロシア上流社会の偽善と虚栄と偏狭と残酷さを鮮然と見せてくれるのです。まるで歌舞伎の女形がくっきりと女の本質を浮かび上がらせるように。

演技することが、社交界の掟。だからこそ、その掟を破って本気の恋に身を捧げてしまったアンナの運命が、統御不可能な炎のように浮かび上がってくるというしかけです。

トム・ストッパードの脚本は秀逸です。無駄のないドラマ展開のなかに伏線を巧みにはり、最小限のセリフで最大限のドラマティックな効果をあげています。

「私を思うなら、平穏を返して」「平穏などありません。悲痛か至高の幸福か、どちらかです」

「愛している」「なぜ?」「愛に理由などありません」など、くらくらしそうなキメ台詞も随所に満載しながら、スキャンダラスな愛の至高の幸福から悲痛な地獄にいたるまでの怒涛のプロセスを、情熱的に書きつづけます。というか、このストッパードの知的

な脚本は、原作に描かれる男女の愛を、普遍性をもつパターンとして抽出し、現代人向けに提示してくれるようなところがあります。

たとえば、愛が成就するまでの王道パターン。男が女を見初め、声をかける。女はひたすらつれないそぶりをし続ける。逃げれば逃げるほど、男はムキになって追いかけてくる。それが限界に達し、男が追いかけることを諦めた瞬間、女が承諾を与える。

おそらくこのようなパターンを踏む時、その後の恋愛は盛り上がり、比較的長持ちするものになるのでしょう。現代では男の草食化や絶食化、恋愛期間の短期化が話題になっていますが、それは、ひょっとしたら、女があまりにも早く承諾を与えてしまったり、女の方が追う側に回ってしまうことに原因があるのかもしれない。

愛の終わり方も、全人類に共通するパターンとし

リョーヴィンとキティのロマンスなど、現代でも「あるある」と頷いてしまう、あらゆる愛のパターンが丁寧に描きこまれています。

それらすべての愛を祝福するのが、ほかならぬコスチュームです。衣装デザイナーはジャクリン・デュラン、「プライドと偏見」「つくない」で各種の賞にノミネートされたり受賞したりしている実力派です。この映画でも、まばたきをするのも惜しまれる豪華なコスチュームの数々を披露し、目と心とアタマを潤してくれませう。

時代ものの衣装はその時代に忠実に、なんていう発想はデュランにはありません。パッスルスカートラインこそ1870年代ですが、ボディには、首回りのタフタや段違いの留め具などに1950年代の「ディオール」や「バレンシアガ」などのクチュールの流行が取り入れられています。さらにアクセサリーは現代の「シャネル」。時代を超えた自由な融合によるコスチュームによって、19世紀の物語が現代にも通じるお話として生きてきます。アンナを演じるキーラ・ナイトレイの衣装はファーやレースもふんだんに使われたゴージャスなもので、ナイトレイは高いチークボーンと長い首、セクシーな手の動きで、妖艶に着こなします。

場面に応じた配慮も行き届いています。たとえば映画のハイライトはヴロンスキーとアンナがマズルカを踊るシーンなのですが、白い軍服のアーロン・テイラー＝ジョンソンと黒いドレスのナイトレイの陰陽バランスのスリリングなことときたら。男が黒で女が白ではないのです。その逆。だからこそ、エロティックな必然でありながらも幸せにはなれない恋愛の末路まで予感させるのです。

愛の末路には、アンナは下着姿のまま、ヴロンスキーをなじます。鳥かごのようなクリノリンは、アンナがカゴの中に閉じ込められていることの暗喩にもなって、いっそう哀しみと憐みを誘います。

他のキャラクターにも神経が行き届いています。アンナの不義の子まで自分でひきとる、つまり、「上着を盗まれたらコートまで差し出す」聖人のような夫、カレーニンを演じるジュード・ロウが着る服は、装飾を省いて禁欲的で、まるで聖職者の服のようだし、社交界の女王ベッツィのヘアとドレスは、日本の芸者からヒントを得たもの。

そんな衣装デザイナーの仕事をはじめ、映画に関わるスタッフ全員の真摯な情熱が感じられる、知的で賢沢で豊かで繊細な映画。人間に愛する力を与えた神にまで感謝したくなる美しい映画です。



©2012 Focus Features LLC. All rights reserved. photography by Eugenio Recuenco, Laurie Sparham

て描かれています。女が男の愛に100%依存するようになり、男の言動に猜疑心をもち、問い詰め、束縛しようとする。男がその重さにげんなりし、逃げの姿勢を見せ始めると、女が焦ってますます男にすがり、挙句に自滅する。時代を問わず、恋に溺れる女が一度は経験しそうな苦い定番コースで、この地獄の経験から教訓を得て蘇った女は感情のコントロールを学んだオトナの女になりますが、アンナはなにしろ初めての経験。感情を相手にぶつけて逆効果を招き、ますます自分自身を消したい衝動に加速がかかっていくのです。

描かれる愛は、アンナとヴロンスキーの焼け焦げるような恋愛だけではありません。アンナの夫カレーニンの聖人のような愛、アンナの兄で浮気を繰り返すオブロンスキーと妻ドリーの間婚愛、田舎領主の

PROFILE

東京大学大学院修了後、ケンブリッジ大学客員研究員をつとめ、文筆家。現在、エッセイスト・明治大学国際日本学部特任教授。過去2000年分の男女ファッション史と現代モード事情を幅広い視野から研究。数多くのメディアで執筆およびレクチャーをおこなっている。

「アンナ・カレーニナ」●監督：ジョー・ライト●出演：キーラ・ナイトレイ、ジュード・ロウ、アーロン・テイラー＝ジョンソン、ほか●配給：キタゲ●2013年3月29日(金)よりTOHOシネマズ日劇ほか全国公開